

- ・ 痛風
- ・ 関節炎：悪い天候で悪化します。痛い場所が移動することがあります。
- ・ 腱の損傷
- ・ 踵の痛み

■神経系

- ・ 頭痛：悪い天候や気候の変化で悪化します。動いていると楽になります。
- ・ 神経痛：とくに三叉神経痛
- ・ 歯痛：悪い天候で悪化します。
- ・ 耳痛、耳鳴り
- ・ 眼の痛み：眼を動かしていると痛みが和らぎます。太陽の光を見ると、眼が焼けるように感じることがあります。
- ・ 雷恐怖症

■その他

- ・ 精巣炎：睾丸に痛みがあり、それはしばしば、つぶされるような痛みになります。お腹のほうにまで痛みが広がる場合があります。痛みは、運動で改善します。慢性化すると精巣が腫脹していることがあります。

ます。痛みは、通常天候の悪化とともにひどくなります。

- ・ 睾丸水腫
- ・ 精索痛

■特異的な感覚

意識が混濁したような感覚、頭皮の打撲感、耳に急に水が入り込むような感覚、腕の血液循環が止まってしまったような感覚、足におもりがついているような感覚、喉に粘液が張りついているような感覚、睾丸が激しくつぶされたような感覚、腹部の波打つ感覚、虫が這うような感覚、手がしびれるような感覚、肢がしびれるような感覚などがあります。

MODALITY

➤ 熱、乾燥した暑さ、太陽の下、動くこと、持続した動き、頭を包むことなど

❖ 天候（嵐の前、荒れた天候、強風の日、雷、雷雨、霧、寒い湿った日、急な気候の変化、曇り）、風に当たること、静電気の変化、夜、真夏、ワイン、冷たい飲物、休息、立つこと、動き始めなど

Rhus toxicodendron ポイズンアイビーとポイズンオーク [落ち着かず常に動く]

Rhus toxicodendron Mich

Rhus radicans, Rhus humile, Rhus pubescens, Rhus verrucosa Sch

BACK GROUND

Rhus toxicodendron は、Poison ivy と poison oak の両方を示します。Poison ivy のほうは、北米、とくにカナダの東海岸に多く自生し、3枚のテカテカした緑



(K)

の葉と赤い茎をもつ草です。この植物は蔓を伸ばして成長していき、川岸に沿ってよく見かけられます。

Poison oak のほうは北米の西海岸沿いに多く自生しています。灌木の植物で、ツタウルシ毒とよく似た3枚の葉をもっています。

両方とも同じウルシ属の植物で、プルービングでは、ほとんど同じ性質をもっていることがわかっています。ウルシ属の植物は、温帯や亜熱帯を中心に、約200種類以上あります。

ホメオパシーでよく使用されるウルシ属のレメディには、毒性のある植物では、Rhus toxicodendron, Rhus diversiloba, Rhus venenata などがあり、毒性のない植物では Rhus aromatica, Rhus glabra, Rhus typhina などがあります。

これらの植物のミルク様の樹液に対して敏感に反応する人は、皮膚炎が生じます。この樹液が体のさまざまな部位に触れて、発疹が広がっていきます。これは、

ツタウルシ毒に対するアレルギー反応によって生じる接触性皮膚炎です。これらの植物の樹液に対して、50%以上の人々が反応を引き起こすと言われています。また、これらの植物を焼却する際に発生する煙に触れると、同じ反応を引き起こす可能性があります。

これらの植物の樹液に触れると、1～3日以内に症状が表れるのがふつうですが、場合によっては3週間後にやっと現れることもあります。まず、樹液に触れた部位は、炎症が起きて赤くなり、極度にかゆくなるのが最初の兆候です。曝露部分における皮膚の圧痛や局所的腫脹、温感がある場合もあります。炎症を起こした皮膚の部分に、発疹や丘疹が出てきます。発疹の多くは、縞または斑点の形に現れます。発疹が赤いにきびの形に大きくなり、水疱ができます。水疱の中には、レモンイエロー色の液体が貯留しています。

過敏な皮膚では、滲出液、膿、痂皮形成が含まれる場合もあり、また皮膚は鱗屑状、赤膚、あるいは肥厚化することもあります。通常この植物に触れてから4～7日目で、発疹是最悪の状態になり、皮膚の症状は、1～2週間続きます。症状は、非常に軽度のものから重度のものまでさまざまであり、毒性植物に対する個体の感受性によって違いがあります。

代表的な原因物質としては、フェノール誘導体の1つであるウルシオール (Urushiol) があります。ベンゼン環に不飽和のC₁₅側鎖がついた有機化合物です。主にウルシ属の植物体を傷つけたときに出る乳液に含まれていますが、イチヨウの種皮やヤマモガシ科シノブノキ属 (ほとんどがオーストラリア南西部に自生) にも似た物質が含まれています。ほかには、没食子、タンニン、フィセチンに代表される各種フラボノイドも含まれています。

MATERIAL

この植物の葉

FIRST PROVING

ハーネマン (『Materia Medica Pura』第2巻)。ブルーピングでの毒性は、主に皮膚、粘膜、その他の部分に現れます。

- ・皮膚：上記に記したとおりです。
- ・粘膜：口の中から喉まで乾燥して、喉が渇きます。冷たい水や牛乳を欲しがります。下痢が起こります。
- ・関節の痛み：動くと楽になります。痛みは、動き始めにありますが、体が温まると消えて、また疲れてくると痛みが戻ってきます。一般的に痛みは温めると改善されますが、湿った環境では悪化します。
- ・発熱：意識もうろうとして衰弱感があります。関節

に痛みがあるので、寝ていても体位を頻繁に変えようとします。ゆっくりと落ち着くことはありません。わずかな動きや少しカバーが外れただけでもふるえがきます。このふるえは、しばしば咳を伴います。

AFFINITY

Rhus toxicodendronは、主に神経系、皮膚 (とくに顔、頭皮、性器)、粘膜、漿膜、腺組織、関節、腱などに強い親和性をもっています。左側優勢のレメディです。

CLINICAL APPLICATIONS

皮膚

- ・湿疹：非常にかゆく、小水疱を伴うことがあります。
- ・皮膚掻痒症：熱いお湯で楽になります。
- ・じん麻疹、乾癬
- ・漆かぶれ
- ・性器または、その周辺部の皮疹

行動療法

- ・子供や若齢動物の問題行動：落ち着きがなく、イライラしています。ときに、悪意のある行動をとることがあります。
- ・大人の場合は、仕事ばかりして、イライラすることが多く、迷信深く、固定観念にとらわれがちです。
- ・忍耐力がなく、うつ状態になっていることがあります。
- ・睡眠障害：睡眠中にいつも体位を変え続けます。

神経系

- ・舞踏病、チック、パーキンソン病、左側の片側麻痺
- ・めまい：起き上がるときに悪化します。後ろによるめきやすいです。

関節炎

- ・急性関節炎、慢性関節炎、リウマチ：炎症は、夜ベッドで悪化します。湿った気候や寒さ、嵐の前、朝起きたときなどに悪化する傾向があります。運動したり、暖めたり、乾燥した気候で痛みが和らぎます。
- ・左肩の痛み：左の肩甲骨の中が痛いことがあります。
- ・滑液包炎、腱鞘炎、捻挫
- ・心臓疾患に起因する左腕のしびれ
- ・腰の痛み、坐骨神経痛
- ・外傷による背中中の痛み
- ・外傷や過度の負荷による筋肉や腱の損傷

消化器系

- ・舌の先端が赤く、舌の上に赤い三角の病変ができます。
- ・咽頭炎：温かい飲物で楽になります。Rhus toxico-

dendron タイプは、一般的に冷たい牛乳、チーズ、牡蠣、甘いものを好みます。肉は嫌いです。冷たい飲物を少しずつ飲む傾向があります。

■心呼吸器系

- ・喘息：とくに皮膚病と併発または、交互に起こる場合。
- ・咳：寒い湿った気候で悪化します。
- ・気管支炎、肺炎
- ・心臓弁膜症、心肥大：ずっと座っているとふるえや動悸がすることがあります。

■その他

インフルエンザ、水疱瘡、膿疱疹、猩紅熱、さまざまなウイルス感染による熱

MODALITY

➤ 運動、暖かい気候、温泉など

❖ 寒さ、寒く湿った気候、隙間風、休息、曇りや霧の日、体を濡らすこと、嵐の前、秋、夜、とくに真夜中過ぎ、仰向けや右下に寝ることなど

RELATIONS

- ・ Complementary : Bryonia, Calcarea fluorica, Phytolacca
- ・ Incompatible : Apis

● Rhus venenata : このレメディは、Rhus toxicodendron のレメディ像に非常によく類似しています。Rhus toxicodendron と比較すると、皮膚の症状が主で、関節への作用は強くありません。

そのため、Rhus toxicodendron と同じ皮膚症状の場合に考慮されます。また、強皮症の重要レメディの1つでもあります。

Ricinus communis トウゴマの種 [母乳]

Ricinus communis L.

BACK GROUND

Ricinus は、インドと東部アフリカが原産のトウガイグサ科トウゴマ属で、高さが5～6mに達する常緑の多年性植物です。

Ricinus の名は、ラテン語でダニという意味で、この植物の種の形に由来しています。



(A)

長い葉柄をもつ葉は互生し、大型で直径30～50cmになり、5～11の裂片が掌状に裂けていますので、楓や梔の葉を大きくしたような形をしています。

開花期は夏です。花はクリーム色で総状花序に頂生し、花序の上部に雌花、下部に雄花がつきます。果実は直径1～3cmで、長い棘に覆われています。その中にある種子から、ヒマシ油が採れます。種子には、ヒマシ油が40～60%含まれています。

ヒマシ油は、水酸基をもったリシノール酸を89.5%も含むため粘度が高く、そのトリグリセリドの構成は非常に安定しており（注）、またアルコール・氷酢酸に溶解し、石油系溶剤に溶けにくいほか、他の植物性油脂にみられない大きな特徴をいくつかもっています。これらの特性については、膨大になるため省略します。

このヒマシ油は、数千年ものあいだ薬として使用されてきました。古代エジプト人は、これを緩下剤、目薬として、またギリシア人は緩下剤のほか、皮膚病にも利用していました。インドでは、母乳の出をよくするためにも使われていました。ヒマシ油は、中世の頃から別名 Palma Christi 「キリストの御手」とも呼ばれています。これは、上述した葉の形状に由来するネーミングのようですが、現在では効能のほうでも、間違いなくキリストの御手になっています。

1900年になって、このヒマシ油はエドガー・ケイ